

# 友の会 通信

2009.10  
No. 91

ASSOCIATES NEWS  
THE MUSEUM OF ORIENTAL CERAMICS, OSAKA

展示のおしらせ  
開催中～11月23日(月・祝)  
❖ 企画展  
「中国陶磁に遊ぶ—入江正信コレクション」  
  
❖ 水都大阪2009開催記念事業・企画展  
「水都大阪再発見」  
  
❖ 平常展  
安宅コレクション中国・韓国陶磁  
李秉昌コレクション韓国陶磁、日本陶磁  
沖正一郎コレクション鼻煙壺  
  
❖ 休館日：月曜(10/12、11/23を除く)、  
10/13(火)、11/4(水)

陶磁器製作の基本的な特徴のひとつにロクロを使うことが挙げられ、これによる造形の対称性は中国陶磁などに顕著にみられる。完全性を志向する限りこの対称性は重要であり、装飾芸術としてみれば、対称性こそが、ふさわしい造形要素となる。

陶磁器においては繰り返しの文様表現と造形の対称性とは、緊密な関係にある。幾何学的な抽象文様に限らず、唐草文や連弁文などの連続文様は勿論のこと、植物文様や動物文様においても、繰り返しのパターンを伴うことにより構成される文様帯は、均整のとれた立体造形にふさわしいものである。確かに完全な対称性は、装飾芸術としては高く評価される要因となるであろう。

しかしながら、装飾芸術は芸術鑑賞の対象としては、近代美学の視点からは物足りない面があることも指摘されている。つまり、均整のとれた完全なる対称性を主眼とする造形や文様では、なかなか緊張感の持続は難しい。複雑な対称性を駆使した傑作でない限りは、いずれ退屈で凡庸なものと感じざるを得なくなる。

対称性の崩れ、あるいは不定形、非規則性、非対称などの要素が見出されると、それが美的契機となり、芸術的な価値が生み出される。そこには工業製品としての陶磁器にはみられない芸術性を獲得した陶磁器といえるものがある。

ここでは、「国宝「飛青磁花生」を例としてとりあげ、陶磁器の時代性や地域性を除外して、純粹造形としての芸術性を見てみよう。この作例では玉壺春とよばれる造形そのものが、非常に多くの要素で構成される、なめらかな局面を有していることもさることながら、青磁の表面に施された鉄斑文の配置に注目してみる。口縁部の鉄斑文はほぼ正三角形の頂点をなすように置かれ、また高台の周りには4か所ほぼ均等に鉄斑が見られる。胴部を構成する微妙な局面には、規則性が感じ取られないような位置に、鉄斑文が配置

されている。しかも、鉄斑そのものの形も変化に富んでいて、規則性を拒否するような面がある。例えばイギリスの風景画家であるJ・コンスタブル(1776-1837)が描く雲の表現に似たものが感じられる。彼は単なる風景画ではなく、そこに描かれる雲の造形を研究し、不定形な雲そのものに見られる美的要素を発見した。このコンスタブルの雲と飛青磁の鉄斑の造形とに、共通する芸術性を認めることができる。

対称性や連続性などの造形的規則性を排除した不定形な造形の中に、美的な深遠が表現されているといえる。また、陶磁器においては抽象芸術としての側面は、極めて重要なものである。(館長 出川哲朗)

## 展示室から

開催中～11月23日(月・祝)  
企画展

### 「中国陶磁に遊ぶ—入江正信コレクション」

京都市在住の入江正信氏からは、これまで中国陶磁コレクション計242件262点を当館にご寄贈いただきました。酒をこよなく愛する入江氏のコレクションは、中国陶磁の酒器あるいは酒器に見立てたものが中心である点に、大きな特色があります。ほとんどの作品は入江氏が一献傾けた愛着深いもので、当館への2度の寄贈に際しては、それぞれ数百人を招いての盛大な「お別れ会」を催されています。50年以上にわたって収集された入江コレクションは、新石器時代の陶器から明清時代の磁器まで幅広い時代に及んでおり、さらに各時代、各地域の様々な製品が含まれており、中国陶磁の変遷をうかがうことができます。碗や杯などの小品が中心ですが、小品ならではの愛らしさがあり、凝縮された中国陶磁の美や魅力を味わうことができます。また、酒器という視点から中国陶磁を見ると、新たな発見があるはず。一人のコレクションを見るということは、その人の人生を



見ることに等しいといわれますが、入江コレクションには人に自慢をしようとか、ひけらかそうといったところが全くありません。純粹に中国陶磁を楽しみ、酒を楽しみ、人との出会いを楽しもうといった文人のような遊びの心にあふれています。(H.K.)

写真上：白磁鉄絵菊唐草文高足杯  
元～明時代・14～15世紀  
霍州窯 高:9.6cm  
Acc.No.11742(入江正信氏寄贈)

写真下：黒釉天鶏壺  
東晋～南朝時代・4～5世紀  
徳清窯 高:18.1cm  
Acc.No.11588(入江正信氏寄贈)

次回展示予定:  
平成21年12月5日(土)～平成22年3月28日(日)  
国際交流特別展  
「北宋汝窯青磁—考古発掘成果展」  
特集展  
「初代宇野宗麿の陶芸」

## 編集後記

❖ 現在開催中の「水都大阪再発見」の展示場の入り口に、大阪の古地図[江戸時代・貞享4(1687)年]の複写を展示しています。それを見ると貞享4年頃には、現在は埋め立てられた曾根崎川(蜷川)が流れて堂島が中之島と並び、文字通り島になっています。また、難波は四天王寺のあたりまで田園が広がり、西は九条島や寺島、勤助島などの島が

連なり海へと続いています。面白く眺めていると、時があつという間に過ぎていきます。(S.S.)

### ボランティアの窓

❖ 兵庫県立考古学博物館主催のキャンプに参加してきた。場所は、1800年前の大中遺跡、本物の土器で作る古代米カレーや雑炊の美味さにびっくり!真正正銘のナイトミュージアムにも参加、白く光る弥生人の骨に暑さも吹っ飛んだ。極めつけは、竪穴式住居での宿泊、耳の真下から聴こえる虫の音に、大地との一体感を味わうことは出来たが、えもいわれぬ湿気と凹凸の地面では、一睡も出来ぬ有様。しかし、

土器が調理用具として優れた機能を持っていることを、身を以って実感できた事は、貴重な体験であった。(M.T.)

大阪市立東洋陶磁美術館  
友の会通信 通巻第91号  
2009年10月1日発行 No.25-3(年4回)

編集・発行:大阪市立東洋陶磁美術館友の会事務局  
〒530-0005 大阪市 北区中之島1-1-26  
TEL.06-6223-0055  
http://www.moco.or.jp  
デザイン:清嶋滋+studioTWN 印刷:岡村印刷工業株式会社



白磁爵  
明時代・14～15世紀  
景德鎮窯 高:11.8cm  
Acc.No.11686(入江正信氏寄贈)

# 「水都の都市と建築」

第70回講演会要旨

◆ 建築史家 川島智生氏

現在、「水都大阪2009」を新淀川の開通百年を記念して大阪府と大阪市が合同で行っています。まず、水都とは何か、確かに大阪是水都といわれますが、何が水都なのか、またそのようにいわれ始めたのは何時からなのか、ということ調べてみました。最初に水都という言葉が使われたのは、昭和3年に大阪日日新聞が立ち上げた水都祭です。本当に水都と大阪がいわれ始めたのは、実はそんなに古いことではないのです。

現在、大阪の水都を代表する景色は中之島と考えられていますが、この中之島の景観を時代を追ってみると、建物の形態によって幕末から現在までの間は5段階に分かれると思います。中之島は歴史的に遡ると江戸時代より前は詳しくわかっていません。江戸時代の初めに中之島には各藩の蔵屋敷が多く建ち、明治時代には、その蔵屋敷を利用して様々な新政府の施設がたくさんできていきます。第1段階では、外国人建築家の設計による川口の居留地の向かいにある江之子島に、キンドルが設計した最初の大阪府庁舎ができ、桜宮にはウォートルスによる造幣局の泉布観が造られます。第2段階では、現在東洋陶磁美術館が建つ場所に大阪ホテルや中之島の図書館が明治30年代、そして日本銀行大阪支店などが造られます。それは、みな木造か、石造か、レンガ造でした (Fig.1)。第3段階は大正時代で、中之島公会堂や、旧市役所ができ、30年前近くまであったレンガ造の立派な大阪控訴院 (現・大阪高等裁判所)、大阪府立医科大学の巨大な建物など、ほぼ中之島の景観が完成していくわけです。それらはレンガ造もありますが、当時ようやく現れてきた鉄筋コンクリート造になっていきます。昭和に入ると、朝日新聞が建て替わって朝日ビルディングになり、現在の朝日新聞の西側に外国人向けの立派な新大阪ホテルが建てられ、さらに西には現在取り壊し予定の大阪ビルディング (ダイビル) ができました (Fig.2)。第4段階の始まりでした。現在、我々の見慣れた風景です。

景観としては川に沿って町家が並び、川に面して洗濯物が干されるなどの生活臭の強い景観が広がっていました。そうした景観を直すため、パリのシテ島などを手本に川岸を変えていきました。またそれと同時に、都市計画が大阪に始まり、道路の幅を広げて橋を架け始め、それが大正末から昭和の初めにかけて最盛期を迎え、大きなビルディングに建て替わっていきます。また、その頃鉄筋コンクリート造の技術が一般化して、石造やレンガ造などに比べると、より安く造ることができるようになりました。その結果、それまで二階から高くても四階までだった建物が、いきなり十階くらいまで建てることができるようになり、すっかり景観が変わってしまいます。その後太平洋戦争によって、大阪のほとんどの町家が焼けてしましますが、鉄筋コンクリートの建物は不燃構造のため焼けても倒壊せず、修繕してそのほとんどが再び使われました。近年はまた変わって、今までオフィス街だったのが、住宅も含めた超高層ビルに再び変わって、大阪の景色がダイナミックに変わりかけています。第5段階といえます。

このように、中之島を中心に考えただけでも、5段階に分かれますが、こんなに明快に分かれる町はありません。たとえば、中之島と対比される道頓堀は基本的に江戸時代にできた町ですが、芝居小屋と芝居茶屋という構造は基本的には変わっていません。中之島は大阪の公的な顔になるので、大阪市や大阪府などが力を入れて、変えていったのです。

大阪を水都と称したのは、何時頃まで遡れるのかと調べたところ、水都という言葉ではないのですが、最初に日本のベネチアと言った人は、ラフカディオ・ハーン (小泉八雲) です。彼は最初松江にいましたが、数年後に神戸を拠点に大阪や京都などをルポルタージュしており、大阪には明治29年に来ました。彼は大阪を水都とみなすことを次のように説明しています。「市全体が、その多くの水路のために、東京よりも更に景色がよい。日本のヴェニスと呼ばれるのも過称ではない。」橋については「日本で大阪ほど数多の橋を有する都会は、他にない。市区の名は橋に基づいてつけられ、距離も橋を標点としてある—いつも高麗橋から計算される。大阪の人は何處へ行くにも、その場所へ最も接近した橋の名を思い起こして、すぐに道筋を知るのである。」と記述しています。

ハーンはその著書『大阪にて』 (ラフカディオ・ハーン全集所載) で大阪の建築に対して驚くほど鋭い視線で詳細に語っています。「風習の点に劣らず建築に於いても、大阪は依然殆ど理想的に日本風になっている。広い大通りもあるが、大抵町幅は甚だ狭い—京都の町よりも狭いくらいである。」当時の京都は東京と並んで積極的に洋風化を目指していましたので、京都には東京と同じくらい洋風建築がたくさんあり、神戸も居留地のため多くの洋風建築がありましたが、その中で大阪は明治半ばまでは少なかったのです。「大阪の中央部には、幾多の頗る大きな建築がある—劇場、料理屋、それから全国に有名な旅館など。しかし西洋風の建物の数はめだって少い。しかし工場の建築は概して西洋式の設計でない。真正の『外国』式建築は、一軒のホテル、二重勾配屋根を有する府庁。花崗石の柱の古典的玄関を有する市役舎、立派な近代風の郵便局、造幣局、造兵廠、数種の製造所、および醸造所 (講師注: アサヒビールの吹田醸造所だろう) である。(中略) 大阪の商人間に、この建築風を模倣しようとの試みもない。」明治の中頃に西洋風の建築をする考えがなかったことを、ハーンは大阪には既に確立したシステムがあったためと、次のように指摘しています。「実際、日本の都会で大阪ほど、西洋建築へ対して厚意を示さないものはない。これは鑑識が足りないからではなく、経済上の経験によるのである。大阪は西洋風に—石材、レンガ、および鉄をもって—建築するのが、その利益疑うべからざる時と場所においてのみ、そうするであろう。東京に行われているように、かかる建築を投機的に企てるということはないだろう。大阪のやり方はじりじり進む方であって、また確実なものに投資する。確実な見込みのある場合には、大阪商人は盛んなる提案をする—二年前ある鉄道の買収と復興のために、五千六万弗を政府へ提供したのはその一例である。」最後にハーンは大阪だけではなく、日本の建築全体についてこのように述べています。「日本の都会は木造の小屋の荒野に過ぎない。そして、大阪もまたこの例に洩れない。しかし家屋の内部においては、いかなる日本の都会の脆弱な木造建築も、多くは美術的構造である。そして、恐らくは大阪ほど多くの立派な住宅を有する都会はないだろう。」



Fig.1 中之島遠景



Fig.2 中之島鳥瞰 『写真集報』大正11 (1922) 年 朝日新聞社所載

現在の東洋陶磁美術館が建っている場所にあった大阪ホテル (Fig.3、4) は、フランス風のルネサンス建築で作られ、一番大きな特徴は、屋根にベランダにみえる飾りと屋根窓があることです。図面を見ると地下と1階の部分だけレンガ造で、2階は木造だったようです。これは明治36年に第五回内国勧業博覧会が行われ、日本や世界各地から来る人々のための宿泊施設を至急造る必要があったため、時間がなく上部だけ木造にしたのです。このため、火事で焼けてしまいます。このホテルのすぐ東側に銀行集会所 (Fig.5) があり、これは中之島で一番古い西洋建築の日銀大阪支店を造った辰野金吾が設計しました。大阪ホテルの前身は明治14年に自由亭ホテルとして同地にでき、明治28年に大阪ホテルと改称します。その後、明治34年に建築家の河合幾次の設計で造りますが、工事中に火事で焼け、また2年後に造りなおしました。しかし、これも大正11年に焼失し、今度は都市計画事業が始まったために、公園の中の建築は許可されず再建されませんでした。

新大阪ホテル (Fig.6) は中之島の大阪ホテルが焼失した後の昭和9年に、外国人向けのホテルが大阪になかったので、大阪市が住友財閥などと費用を出し合って造りました。新大阪ホテルには巨額の費用がかけられ、それは主に、当時非常に高価だった冷房か、インテリアなどの装飾にかかったと思われる。この建物は、ヴェネチアの町の建築の装飾スタイルであるヴェネチアン・ゴシック・スタイルで造られました。新大阪ホテルにヴェネチアン・ゴシックをもちいたのは、当時の大阪市の建築顧問であり、都市計画やデザインの顧問をしていた武田五一でした。彼は、大阪は水の都なので、同じ水都であるヴェネチアのスタイルが相応しいと考えました。武田五一は京都大学の建築科と京都高等工芸学校 (現・京都工芸繊維大学) の創設者でもあり、法隆寺の修復も手掛けた人物です。しかし、大阪の建築にヴェネチアン・ゴシックを用いるという武田五一に、異論を申し立てるグループが出現します。

日本インターナショナル建築会という、大阪・京都を拠点に戦前に活動した前衛的な建築グループで、広い意味での国際的な新しい建築の普及を目指していました。戦前まで日本中の役所には建築デザイナーがいて、積極的に優れた建築を造るという機運に満ちており、大阪市は特に盛んに行っていました。この建築会のメンバーには大阪市役所の建築課の職員、技師が多く名を連ね、『日本インターナショナル建築』という月刊の会誌を7~8年にわたって出版していました。このグループの中心メンバーに大阪市首席技師を務めた伊藤正文がいます。このインターナショナル建築会は、最近再評価され、幻の本だった会誌も国書刊行会から復刻されています。土佐堀ダムと水晶ダムは伊藤正文がデザインしたということが、この会誌からわかります。建築課所属の伊藤正文が、ダムの設計という土木課の工事に何故関わられたかという、彼はデザインが上手でしたので、兼務したわけです。その理由は大阪市主催の橋の設計競技に入選していたからです。大阪のあらゆる公共施設は、実は市民、住友などの富裕者の寄付でできているのが多く、しかも現在のコンペにあたる設計競技ということが行われました。誰もが参加することができる設計競技で、町のほとんどの建物ができたのも大阪の特徴です。たとえば、中之島の公会堂は辰野金吾が自分の教え子10人くらいに設計させて、その中から一番すぐれたものを選んで造りましたが、それ以外の大阪市役所や天王寺の美術館、あるいは大阪府庁舎などの大きな建物は、学生でも参加することができた設計競技によって実際にできあがったのです。また、大阪の橋もすべて大正時代の終わりごろに、市が行った設計競技によって決るなど、非常に平等な良いシステムでした。

さて、大正時代の大阪について、生協運動で有名な思想家、賀川豊彦は「大阪の美はやはり水的美である」「私はむしろ淀川べりの旧式の土蔵が遥かに日本らしいと考える」と語っています。そして、大正8年には論文で、「大阪の川に下水を流しこまない。河岸をきれいにする。川岸に建つ家並みを揃える。」という3項を提案しました。さらに昭和になって、都市計画事業がほぼ軌道にのり始めると、様々なジャーナリストが大阪を取り上げます。この頃になると大阪はパリを始めとするヨーロッパの都市に匹敵する立派な水都だと、ジャーナリストによって謳われました。

それを代表するのがサンデー毎日の編集長を務めた北尾隼之助でした。彼は昭和の初めに『近代大阪』に「大阪は水都だというが、都市としての交通が発達すればするほど、ある意味に於いて、河川は衰退することになる。」道路を拡張して橋を広げると、自動車が非常に便利になり、それまで河川を使って物資を運んでいた船の需要が大幅に減り、川の利用が無くなってしまおうと警告しています。大阪の町は、川に面して建物がひしめきあって、生活のにおいがしていました。彼はこういう川の風景こそが水都大阪の代表するものだと記します。『近代大阪』は近世の蔵の風景からビルディングのモダンな風景に変わり始める大阪を、北尾が非常に新鮮に見つめて書いた記事を集めたものです。

また、賀川豊彦の大正9年にまとめられた『地殻を破って』には、大阪の事が色々書いてあります。「今後大阪には市区改正のもとに、大道路に沿って結ぶ美しいコンクリート建築物ができるであろう。大阪は飛躍する。大阪は決して下品な町ではない。」「近松の言語をそのまま保存してきた。」このように、大阪のことを褒めています。ここでもやはり、大阪のことをヴェニスと例えています。

また昭和7年に出た『日本都市風景』では、都市美の研究家でジャーナリストの椽内吉胤は「あの数多い河岸にのしかかるように建った家…。その家がその裏口を水面に投影してならび建っている風景は、やはり大阪の大阪らしい風景の一つだ。」「水の都大阪の都市風景を繋いでいる要素として、私どもは橋と橋、水と水を見落とすことができない。」この少し前に関東大震災があって、東京の町家が全部焼けたので、町家がたくさん残っていたのは大阪だけでした。この大阪の町家こそが本当にすごいのだという認識があったのです。

これらの本は、決して建築の専門家ではなく、ジャーナリストや建築以外の分野の人が書いていますが、大阪に対する優れた指摘として注目できます。



Fig.3 大阪ホテル (公園側) 河合幾次設計 明治36 (1903) 年



Fig.4 大阪ホテル (堂島川側) 長崎大学附属図書館蔵



Fig.5 大阪ホテルと銀行集会所 辰野金吾設計 明治37 (1904) 年



Fig.6 新大阪ホテル 高橋貞太郎・武田五一設計 昭和9 (1934) 年

プロフィール



川島智生氏 1957年生まれ。京都工芸繊維大学大学院博士課程修了。学術博士。一級建築士でもあり、日本近代建築史を研究し建築史家として活躍。現在神戸女学院大学非常勤講師。